



私は自他共に認めるゴジラオタクです。その昔、この『夕焼け通信』紙上に過去のゴジラ映画の益体も無い情報ばかりを紹介した『ゴジラの足跡』なる拙文を連載させて頂いたこともあるほどです。

なので先だつて新作映画『ゴジラ マイナスワン』が公開されると、妻からは「ゴジラ見る？」久しぶりか会った息子からも「ゴジラ見た？」と聞かれたのも当然だったのですが、それに対する私の返答は「うん、どうでしょう？」何故か最初はあまり食指が動かなかったのです。

そもそも山崎貴監督がゴジラを撮ると聞いた時はあまりにも意外性がなく期待半分不安半分、テレビで予告編のCMを見たときには不安の思いが強くなりました。時代は終戦直後、主人公は特攻崩れという設定を知りにいたつては、前頭葉の辺りがムズムズするような妙な匂いを感じ取ったのです。これ、もしやするとハズレかもと。ところがスタートダッシュは『シン・ゴジラ』を上回る大ヒット、ネットでも手放しの大々絶賛。これはどうしたことか、やはり映画は見ないとわからない(当たり前)、ゴジラオタクとしては見ないと後悔するに違いない。で、意を決して？松江東宝

5のレイトショーに出かけてきました。

映画としてはとても面白かったしVFXも素晴らしい。『シン・ゴジラ』で庵野監督に鍛えられた白組(山崎監督が所属する映像制作会社)の技術者も参加したというゴジラの異様に削り込まれたCG造形には目を見張るものがありました。ゴジラが口から出す放射能熱線の発射シークエンスも、その破壊力も今まで見たことのない驚きに満ちた表現でした。けど、そのゴジラ自体の発生と存在理由が曖昧模糊で、物語を繋ぎ合えず狂言回しにしか見えなかったのです。

ゴジラはとても抽象的な代物です。空白期間はあるものの七十年の長きにわたり映画が削り続けられ、その時々を作り手によつて様々な姿かたちを与えられてきました。故に個々の映画のストーリーや設定によつてゴジラの出自は変化するのですが、マイナスワンのゴジラは明確な実体が謎のまま続きます。邪推すれば、意地悪な神様がゴジラの着ぐるみをまとつて暴れただけのように思えたのです。

ちなみに銀座を走る電車のシーンの音響効果に、出雲地方のローカル線『一畑電車』が協力しているそうです。地元ファンとしては喜ばしい限りです。

空き家 5

木幡智恵美

生家の行く末④

畑を借りている伯父の家も空き家だ。早期退職をした春、「畑でもやろうかと思つて」と言うと、「使つたらん畑があるから、あそこ使え」と伯父。一度も使つたことが無いという荒地だった畑は相変わらず草原のようだが、今も細々と野菜作りを続けている。

伯父には肺気腫の持病があり、定年退職後に出雲の家に住んだ。祖母が亡くなった年に建つた家には伯父の連れ合いが住んで伯母を引き取つたものの、わずかの期間でまた尼崎へ帰つて行つた。伯母はその後長く施設暮らしとなる(数年前九十五歳で亡くなった)。

畑を借りた頃の伯父は、その家に一人で住み、定期的に尼崎へ帰つていた。伯父が私たちに野菜の栽培の仕方を教えてくれ、私たちは伯父にパソコンの使い方を教えた。それから数年後、一人で住む伯父の身体を心配してか、連れ合いも一緒に出雲の家に住むようになった。ところが、しばらくして連れ合いが重篤な病気に陥り、回復はしたものの後遺症に苦しむようになる。伯父も年々肺の状態が悪くなり、酸素ボンベを常時つけるほど。そんな病病老老介護の二人のどちらかが具合が悪くなると、尼崎よりはずつと近くにいる私に連絡が来て、病院に連れて行つたり、救急車で運んだり、大変な時期があった。

そのうち、連れ合いは尼崎の施設に入所し、息子に諭された伯父は尼崎に帰つて行つた。二度ほど尼崎の家を訪ねたが、二度目に行つた時、部屋でテレビを見るともなしに見ていた伯父が言う。「ちえみい、おつあんなあ、今は不幸や。若い時は良かったけどなあ」。身体が悪いので外にも出られず、一日中テレビ相手だと言う。姉妹は元より、会社の部下たちの面倒見の良かった「ええかつこしい」の伯父の小さくなった姿に何も言えなかった。

その伯父が亡くなり、連れ合いも亡くなり、家は放置されている。従弟がこの家に住んだのは高校生の一時期だけ。夫の従弟の目のように高校卒業まで住んでいたわけではなく、愛着はほとんどないだろう。除草剤を撒ぎに行くたびに、破れかぶれのビニールハウス、錆びた郵便受け、落ちた樋などを目にする。従弟は築五十年のこの家をどうするつもりだろう。

30代フリーター 米中首脳が1年ぶりに対面で会談し、偶発的な衝突を防ぐために、軍幹部同士の協議などを再開することで合意した。

年金生活者 アメリカは「台湾有事」への懸念を強調する。だが、中国自身はそれを台湾統一のプログラムの中でも避けたい選択肢と考えているはずだ。アメリカは口では言わないものの、中国と台湾の関係を国家どうしの関係と見ている。しかし、古代から続く「帝国」をひそかに自認する中国は、台湾を冊封体制のもとにある臣下とみなしている。臣下を相手に戦争したり、その土地を侵略したりすることは建前上あり得ない。

中国と台湾の対立は、中国共産党と国民党の内戦の続きのように見えるかもしれない。だが、大陸での内戦と、海峡を挟んだ現在のにらみ合いとは性格が異なる。国共内戦は「帝国」の「皇帝」の座をどちらが取るかの争いだった。共産党がそれを取って70年以上たった現在、その争いは終わっている。

年金 中国が「一つの中国」を言うのは、バラバラな現実があるからだ、と岡本隆司という中国史の研究者が指摘している（『教養としての「中国史」の読み方』）。中国が21世紀の現在も古代以来の「帝国」であり続ける理由もそこにあると考えることができる。

中国がバラバラなのは、国土があまりに広くて、地域ごとに違いがあり、まとまりにくいいため、と岡本は説明する。各地に言葉も文化も違う様々な種族が存在し、それをまとめる諸権力が互いにせめぎ合っている状態を、同一の制度のもとにまとめるのは不可能に近い。それで選ばれたのが、各地の諸権力の独立性をある程度まで容認する「帝国」というシステムにほかならない。共産党政権が香港や台湾に適用すると言っている「一国二制度」も「帝国」の伝統にのっとったものだ。

30代 ヨーロッパにも「帝国」は存在した。古代ローマ帝国が滅びたあとは、神聖ローマ帝国が近世まで続いた。

る。台湾の国民党が北京を敵視しない姿勢をとっているのはそのあらわれであり、中国にとつて、台湾に軍隊を送って内戦を継続しなければならぬ理由はない。臣下だから懲罰のための武力行使はあり得るが、懲罰では統一はおろか占領さえできない。

問題は台湾が臣下としての礼を尽くさないことにある。だから、中国はそれをするように仕向けるために、かつての「朝貢」を「一带一路」政策として復活させ、冊封体制を周辺に再構築して、台湾を包囲しようとしている。

30代 ロシアも同じように「帝国」を自認しているのに、なぜ臣下のはずのウクライナに戦争をしかけたのかという疑問がわく。

年金 中国は長い歴史の中で繰り返した周辺の諸族からの侵入を受けてきた。その結果、軍事では攻撃よりも防御に重点を置かざるを得なかった。それは共産党政権になっても変わらず、核の先制使用を否定していることにそれがあらわれている。だから、台湾を「攻

年金 しかし、ウエストファリア条約に象徴される主権国家システムの誕生とともに消滅し、その後「帝国」が復活することはなかった。「帝国」を構成する各地の諸権力は主権国家として独立し、やがて均質な国民で構成され

撃」とするという判断に至るまでにはいくつもの関門を経なければならぬ。軍備の強化を進めているのは台湾を「攻める」ためではなく、アメリカから「守る」ためだという理屈だろう。

これに対し、ロシアは不凍港を求めて繰り返し域外への進出を企ててきた。だから、軍事では防衛よりも攻撃になじんでいて、ウクライナを攻めるときは、それほどためらいなく踏み切ったと推察される。

もうひとつ両「帝国」の違いを加えるなら、歴史の長さがある。中国の歴史は4000年前にさかのぼることができるのに対し、ロシアの起源は9世紀とされる。中国が物事を長期的に判断するのに対し、ロシアはより短期的に考えやすい。中国が台湾をじっくりと囲い込もうとしているのに対し、ロシアにはそれほどこらえ情がなく、ウクライナに攻め入ったと考えることができる。

30代 台湾をめぐる中国はことあるごとに「一つの中国」を強調する。

る国民国家になった。

「帝国」にとつて、領域内の諸権力は自らの支配を支える存在であると同時に、脅かす存在でもある。そのリスクを回避するために、中国の皇帝は領域外に支えを求めた。それが自らのもとへ朝貢してくる服属国であり、そのシステムが冊封体制にほかならない。21世紀の「皇帝」である習近平が台湾の独立を恐れる理由のひとつをそこに求めることができる。

30代 アメリカ側からは「台湾有事」の可能性を指摘する主張が絶えない。

年金 そう言わざるを得ないアメリカの都合があるからだ。中国との覇権争いをやめられないアメリカはこの先、北京政府と友好関係になる選択肢は捨てている。しかし、流血の戦争だけは避けたい。そのためには、融和が無理な以上、抑止力の強化、つまり軍備の増強しかない。それに世論の支持を得るには緊張状態が必要となる。それを保つ方法のひとつが「台湾有事」というプロパガンダにほかならない。

「台湾有事」はあるか